

第16回 ベストデビュタント オブザイヤー

【選考方法】

各界で華々しい活躍をされている選考委員（ボードメンバー）より、選考基準を満たした若手クリエイター&アーティストを推薦していただき、MFUベストデビュタント選考会によって最終決定を行う。

【選考基準】

- ・世界に通用するポテンシャルを有していること
- ・独自性、創造性において、類をみない才能を持っている人
- ・ソフト立国日本に向けて今後大きな活躍が望まれていること
- ・次なる世代に向けて夢と希望を与えることのできるスター性を持っていること

【選考委員長】

クリエイティブディレクター／ビジュアルアーティスト
タナカノリュキ

【選考委員】

株式会社スプリー代表／コラムニスト／コメンテーター
安藤美冬

永山祐子建築設計 主宰／建築家
永山祐子

ヴァイオリニスト／ミュージシャン
葉加瀬太郎

スタイリスト
満園正明

株式会社ビームス 創造研究所（HALS）本部長
シニアクリエイティブディレクター
南馬越一義

順不同・敬称略

BEST DEBUTANT OF THE YEAR

ベストデビュタントオブザイヤー
2019.11.27

16th

【主催】

MFU
THE MEN'S FASHION UNITY

一般社団法人 日本メンズファッション協会

（お問い合わせ） 東京都渋谷区神宮前 4-18-6 イスルギビル 1F
TEL: 03-5412-2330 FAX: 03-5412-0940
URL: <http://www.mfu.or.jp>

【協賛】


江戸川大学
EDOGAWA UNIVERSITY


M. MOWBRAY


KIKURABO


SPIRICO
POWER CREATIVE


Neu
interesse


B's
B's Int'l


maachi
&
sons

【BOOKLET STAFF】

producer: TANABE MASATAKE(Spirico.inc)

designer: NAKANO KEISUKE(Spirico.inc)

copy writer: KURODA YUKIKO

CHANU

Eiko+Eriko

Song

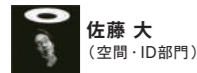
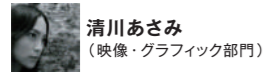
Iwase Ryoko

Nakagome Takanori

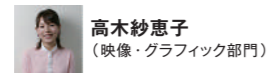
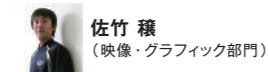
BEST DEBUTANT OF THE YEAR

2004年より発足した、若手クリエイターの発掘支援を目的としたプロジェクト「ベストデビュタントオブザイヤー」。毎年、ファッション、映像、グラフィック、アート、音楽、建築、文芸などの分野で、彗星のように現れ、各界に多大な影響を与えた若手クリエイターの中から選出し顕彰している。

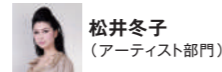
1st



2nd



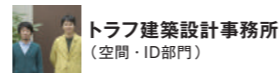
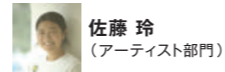
3rd



4th



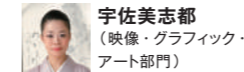
5th



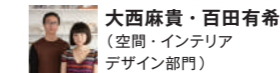
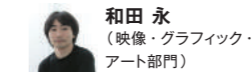
6th



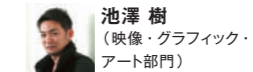
7th



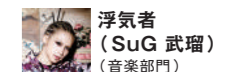
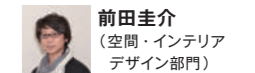
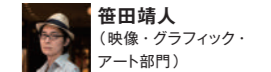
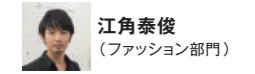
8th



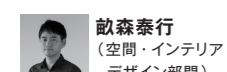
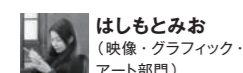
9th



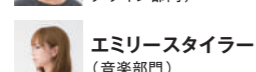
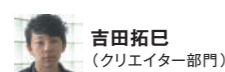
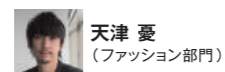
10th



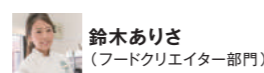
11th



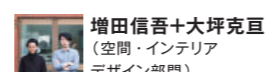
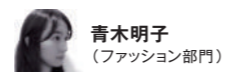
12th



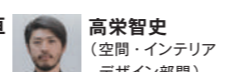
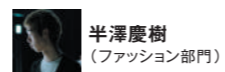
13th



14th



15th



16th

16回目を迎える今年のベストデビュタントオブザイヤーに、各部門から4名と1組が選ばれた。彼らの活動の軸となっているものは何か、どんな未来を創ろうとしているのか、今の想いを語ってもらった。

軸

李 燦雨
(ファッション部門)

爽やかな
ファッション

軸

EIKO+ERIKO
(音楽部門)

向上心
Try and Error

軸

Song
(音楽部門)

家族。人。
食。運動。

軸

岩瀬諒子
(空間・インテリアデザイン部門)

自分に正直に
心からよいと
思えるものを
つくりたい

軸

中込孝規
(特別賞)

自分の経験

ファッション部門

李 燦 雨

ACUOD by CHANU デザイナー

高校を卒業し、兵役も終えた。
生まれたからには、
本当にやりたいことを。

幼い頃から学校の勉強が大嫌いでした。ただ、自分でやりたいと思ったことは本気でやって先生や周りの人を驚かせることもありました。高校を卒業し、兵役を終え、生きることに、死ぬこと、そして自分が本当に好きで続けられることについて半年ほど考えました。これだ！という答えは出ませんでした。生まれたかぎり自分が楽しくやれることで周りの人に楽しさと幸せを感じてもらいたいことが一番だと思うように。そして23歳のときに、子どもの頃から興味があった原宿のストリートファッションやハイブランドのある日本に来たのです。

日本語の勉強は、東京ではなく山梨で。本気で集中できる環境で、1秒も無駄にすることなく身につけたからです。1年後には日本語能力検定1級を取得。卒業後、何をするか悩んでいたときに、母から「君がずっと好きだったのはファッションだと思うよ」とメッセージが。読んだ瞬間、雷に当たったような衝撃を感じました。ファッションの専門学校でも、1秒も無駄にしないというスタイルを貫き、3年では授業が物足りなく感じるように。さまざまなコンテストに挑んで受賞もしましたが、コンテスト作品は100%自分が作りたいものではありません。早く自分で作りたいものを作りたいと思い、4年になってすぐにファッションブランド「ACUOD by CHANU」を立ち上げました。しかも、たった40万円で(笑)。



2017AW



2019AW

自分が死んでも、
ブランドは愛され続ける。
そうならば幸せです。



profile

1988年韓国生まれ。2013年東京モード学園高専専門士コース入学。A DEGREE FAHRENHEITのインターンシップなど数社で経験を積み、2016年ACUOD by CHANU設立。LINEAPELLE-MILANO INTRECCANTIERE 2016 2位、東京新人デザイナーファッション大賞2015 秀作賞等の16のコンテストで受賞している。2017SSシーズンより2019AWシーズンまで6シーズン連続で東京コレクションに参加。色んな映画やCM、ライブ衣装から、ジャニーズ、AVEX、LDH、K-POP、バンド系など色んなジャンルのアーティストや、沢山の俳優、女優、芸人、運動人など幅広い分野の著名人達に衣装や私服で愛用されている。

JAPANブランドとして、
新しい価値を
世界へ発信していく。

「ACUOD」は「Ace Creation Unisex Original Dress」の略称であり、日本語の「同化」という文字(DOUCA)を反対に並べた造語でもあります。そして「同化」の反対語は「異化」であり、つまり「ACUOD」はその両方の意味を持ち合わせています。ジャンルも関係なく、カルチャーも含めたさまざまなテーマに対して、異質な要素や概念を取り入れて「同化」し、新しい価値観を創り出し「異化」していく。そんなブランドとしての願いを込めています。

僕が追求するデザインは見た目だけ美しいものでもなく、機能性だけ優れているものでもなく、機能性が優れている上での美しいデザインです。リサーチする中で出会ったYKKのEXCELLAという種類のファスナーは、まさに僕が求めている創造物でした。繋げたり開けたりできるファスナーを通して、新しい価値観を開く、異なるジャンルを繋げるという意味で、ブランドを象徴するツールにしています。他にも日本人には職人の魂がこもっている生地やパーツ、縫製技術があります。日本でファッションを学び、日本の物に魅了され、これまでJAPANブランドとして展開してきました。今後も東京をベースに、パリやロンドンでもコレクションの発表をしていきたいです。

デビュタントへの質問

Q. 自分の性格をひとことと言うと？

A. 「愛燦燦」
とても愛溢れてとても明るいという意味で。
自分の名前に入っている漢字でもあります(笑)。

Q. いちばんうれしかったことは？

A. 常に、今。

Q. あなたの軸となっているものは何？

A. 全ての事に感謝しながら
何事でも前向きに進める心構え。
小さな事でも受けた恩恵を忘れずに
必ず恩返しする姿勢。



一人は無理でも
二人なら
できる音楽
がある。

音楽部門

eiko+

ピアノ連弾 UNIT

デビュタントへの質問

Q.自分の性格をひとことと言うと?

A. センシティブ

Q.いちばんうれしかったことは?

A. 憧れだった作曲家マリアシュナイダーに
自分の曲を聞いてもらった時

Q.あなたの軸となっているものは何?

A. Try and Error



eiko + eriko

歌のない
インストで、

笑顔を
増やしていく。

eriko



デビュタントへの質問

Q.自分の性格をひとことと言うと?

A. 直感人間

Q.いちばんうれしかったことは?

A. パークリーに行けることが決まった瞬間

Q.あなたの軸となっているものは何?

A. 向上心を持ち続ける



一緒に過ごした三年間で、 連弾というスタイルを確立。

二人ともそれぞれパークリー音楽大学出身の杉本ゆみ先生(ピアニスト・作曲家)に師事していたところ、先生が同じタイミングでパークリーを目指していた私たちを引き合わせてくださいました。受験に向けて一緒に対策し、そして二人とも無事合格。渡米直後から卒業までの3年間、ルームシェアをしていましたが、ケンカすることもなく笑顔の絶えない日々でした。パークリーではeikoが作曲、erikoがパフォーマンスを主に専攻。お互いに「いつか一緒に音楽をやってみたい」という思いを抱いていて、eikoが既存のポップス曲を連弾アレンジする仕事を受け、erikoへ連弾の演奏を依頼したのをきっかけに、オリジナル曲を作ってみたり、リサイタルを開いたりするように。そしてタイガー大越先生に背中を押していただき、帰国して二人でやっていくことを決断。そこから日本での活動が始まったのです。

一人では無理でも、 二人ならできる音楽がある。

ピアノ連弾ということで、二人がいるからこそできる音楽であることにこだわっています。自分

一人では弾けないものが思い浮かんだとき、二人だったらこんなこともできちゃうかも!と考えながら曲を作るのはとても楽しいです。曲によって伝えたいメッセージはそれぞれもちろん異なりますが、ピアノとドラムというシンプルな編成でどれくらいお客さんを驚かせられるか、楽しんでもらえるか、というところを大切にしています。

私たちは、クラシックやジャズなどのインストゥルメンタルと呼ばれる歌のない音楽に幼少期から慣れ親しんできました。私たちは音楽に感動や勇気をもらい、時には救われ、そして時には心から笑顔になることができました。今、日本においてインストの市場はどんどん狭くなってきています。なんとなく敷居が高いものと感じてしまったり、実際に演奏会に足を運んでも良さがわからなかったり、そもそも興味がなかったり色々な理由があるかとは思っています。私たちの音楽をなんとなく耳にしたとき、あれ、意外とピアノの曲っておもしろいじゃん、とインストに興味を持ってくれる人を一人でも増やすことができたら、今までたくさん救ってくれた音楽への恩返しができるのではないかと考えています。最終的に、家族やカップルが週末にディズニーランドや水族館、プラネタリウムに行くような感覚で、「eiko+erikoのショーを見に行こう!」と思ってもらえることが一番の理想です。

profile

えいことえりこは、米国の名門、パークリー音楽大学を卒業した二人のピアニストによる連弾デュオ。同校在学中にUNITを結成し、活動を始める。

2018年東京に戻り、卒業記念TUORを行なう。以後東京をベースに日本での活動を開始。

2019年5月より隔週で、渋谷クロスFMにて、レギュラーコーナーSTART～

2019年9月東京JAZZ 2019 に出演

2019年10月佐世保JAZZ祭に出演

その他、FM各局のイベントや、ビルボードの制作イベント、

世界的なクリエイターイベントTrojan Horse was a Unicornなどにゲスト出演。

2019年の音楽シーンにおいて、大きな注目を集める存在になって来ている。

11月には、1stアルバム glitter を発売開始! 配信により世界的デビューを果たす。

アルバム8曲の楽曲は、すべてオリジナル、そしてほぼ一発撮り、グランドピアノの連弾とドラムというシンプルな構成で、造られている。このシンプルで、かつ迫力ある構成は、世界的にも他に類を見ない。

2人のUNITは、クラシック、ジャズ、ロック、POP、すべてのジャンルの垣根を越えていく、ピアノ連弾とリズムのNEW WORLD!

音楽部門

Song

エレキバイオリニスト

音楽は最も強力な言語。

日本から世界に、
もっともっと色々な事を
発進していきたい。

profile

英国王立音楽大学卒業。
在学中にエレキバイオリンに出会いこれまで15ヵ国以上で演奏。
ロンドン時代よりAbby RoadでのレコーディングやTV出演など様々なステージに立ったのち、ヨーロッパで学んだ「魅せるパフォーマンス」を日本に広めたいとロンドンから東京に拠点を移しエレキバイオリニスト“Song”として活動を始める。
フジロックではBelle and Sebastianのサポートメンバーとしてメインステージに出演。(故)内田裕也氏のNYWRFに2年連続で出演し、TVや東京カレンダーで「魅せる・踊るバイオリニスト」として紹介された。
アーティストやミスコンのオープニングアクトやCMの楽曲/出演を担当するなど「見て・聴いて・感じる」エンターテインメント性の高いステージを繰り広げながら、クイーンエリザベス号を始め海外の豪華客船に乗船し世界中でShowを行なっている。
先月京都で行われたイベント「きょうといちえ」ではX JAPAN/LUNA SEAのSUGIZO氏とコラボ演奏した。自身のエレキユニットSTORMはフジテレビの昼ドラマ「ほっとけない魔女たち」の劇中メインテーマ曲がSTORMの為に特別に書き下ろされるという、結成間もないインディーズユニットとしては異例のテレビデビューをした。2016年に発売された1st アルバム「D」に続き、2017年9月6日には2ndアルバム「Scarlet」が全国発売された。

Song
the violinist

デビュタントへの質問

Q.自分の性格をひとことと言うと?

A.365日前向き。

Q.いちばんうれしかったことは?

A.自分を幸せにすることが職業になったこと。
バイオリンに出会えたこと。
たくさんの方の笑顔に出会えること。

Q.あなたの軸となっているものは何?

A. 家族。人。食。運動。





主張しなければ、
欲しいものは手に入らない。

兄の真似をしてバイオリンを始めたときは、バイオリン=オモチャだと思っていました。本気で向き合ったのは、ステージに立つ私を見た母が誇らしくうれしそうだったから。練習にも夢中になりました。9歳という年齢は、バイオリンを習うには遅いスタートだったため、先生に門前払いにされるなど大変な時期もありましたが、母は私のどんな決断も信じてサポートしてくれました。英国王立音楽大学では世界各国のハイレベルな音楽家達がライバルであり苦楽を共にするファミリー（みんな国を離れて来ているのでお互いを頼ってファミリーのようでした）。このような最高の環境で4年間を過ごせたのは何にも変えがたい経験でした。音楽家としてだけではなく移民の方が多く暮らしている移民大国で人としても多くを学びました。ロンドンは強くなること、主張しなければ自分が欲しいものは手に入らないことを教えてくれました。



聴かせるのではなく、観客と共にエキサイトする。

エレキバイオリンと出会ったのは、ロンドン時代からの親友で、私が憧れているバイオリニストが「Songに絶対あってると思う!」と誘ってくれたのがきっかけです。もともとハウス/クラブミュージックが好きだったので、動き回りながら演奏する彼女の演奏スタイルを見て、すぐに虜になりました。アコースティックバイオリンは私にとって、自分や音楽の「感情」を音にのせて相手に伝えるパートナーで、「私からオーディエンスに伝える」というスタンス。エレキはオーディエンスにパワーを感

じてもらって一緒にエキサイトするツール。一方的ではなく、アイコンタクトで会話しながら「その瞬間をオーディエンスと共有してパワーを生み出す」スタイルです。私の演奏を見て、感じて日常とは違う「非現実的」な時間を一緒に共有することによって「私もまた明日からがんばろう」「スッキリしたな」「パワフルだな」などポジティブな気持ちをオーディエンスの中に残せたらな、と常に思っています。そのために音楽はもちろん、衣装やステージングなどでも、皆さんの「バイオリニ

スト」のイメージをいい意味で裏切るステージを創り上げることを大切にしています。ここ数年、企業イベントや海外遠征、アーティストとのコラボにチャレンジしていますが、やってみたいコラボは「お寺+エレキバイオリン+プロジェクトマッピング」です。一見アンバランスなものを一緒にまとめて作品にすることが好きなんです! 日本でバイオリン/音楽/アートがもっと人々の日常に浸透して身近なものになるようパワフルに活動していきたいです。

設計とは、誰かの生活を豊かにできる仕事。
自分が信じられるものを、
正直に 生み出していく。

空間・インテリアデザイン部門
岩瀬 諒子

建築家／岩瀬諒子設計事務所 主宰

興味を持ったのは、
素材の組み合わせや扱い方。

小学生のころから、自分の部屋をカスタマイズ（今でいうDIY）するにはまっていて、棚やテレビまでペンキを塗ったり、新潟から東京までインテリア雑貨を買いに行ったりしていました。そのようすをみていた父親が、建築という分野を紹介してくれたのです。大学では素材の組み合わせを研究テーマとし、その後素材の扱い方が設計の大きなテーマになっている国スイスで学び、素材の扱い方が特徴的な隈研吾事務所を就職先を選びました。不思議と今もその興味は設計の根幹になっていて、見たことのない素材を手にしたり、開発した素材サンプルが手元にやってきました、使い方を思いつくときはとても楽しくなります。独立すると、表現することの重さや実現の苦しみもありますが、それ以上に今まで知らなかった人たちと一緒に、知らなかった地に想いを馳せて新しい構想を生み出す楽しさが今のところ勝っています。

トコトコダンダン（2017）©新建築社





地域の方々の生活リズムになじんでいく空間を。

私の建築家としての活動の大きな特徴は、インテリアや建築空間の設計から、土木インフラや広場、ランドスケープなどの外部空間のデザインを横断的に設計対象とするところだと思います。それが堤防のリノベーション「トココダン」 という壁型の形状を階段状やスロープ状にした遊歩道と広場空間の設計に結びつきました。独立してから5年間、かかりつきりに近い形で、この大きなデビュー作を2017年に完成させ、国内で評価していただくことができました。建築や土木は構想までに時間がかかります。今取り組んでいるプロジェクトの多くは2~5年を要しますが、こうして自分の設計した空間が地域の方々の生

活のリズムの中になじんでいくのを目の当たりにするのはとてもうれしいことです。アイデアが冴えないときは落ち込んだりもします。それでも自分の大好きな設計という行為を通じて誰かの生活を豊かにできるのは幸せなことだと思いますし、その実感があるからがんばれます。来年は、「ベネチアビエンナーレ2020日本館」の代表作家に選んでいただき、パリの作品出展の機会もいただいているので、積極的に海外発信をしていく年にしていきたいと思っています。これから先も出会った仕事と丁寧に向き合い、心からよいと信じられるものをつくっていけるように、自分に正直でありたいと思います。



profile

新潟県生まれ、京都大学工学部卒業。同大学工学研究科修了。
EM2N Architects (スイス)、隈研吾建築都市設計事務所を経て、
2013年大阪府主催、河川沿いの広場設計業務実施コンペ最優秀賞受賞を機に、
岩瀬諒子設計事務所を設立。当該作品を堤防のリノベーション「トココダン」として2017年に発表。
建築空間、土木インフラやパブリックスペースのデザインまで、領域横断的に設計活動を行う。主な受賞に日本造園学会賞
(設計作品部門)、グッドデザイン金賞、藝大美術エメラルド賞、和歌山市和歌山城前広場・市道中橋線設計プロポーザル1等。
2020年ベネチアビエンナーレ日本館の出展作家として選出。東京藝術大学助手を経て、現在京都大学、神戸大学等にて非常勤講師。

「トココダン」(2017) ©岩瀬諒子設計事務所
大阪府木津川にある堤防のリノベーション。かつて自然とまが溶けあう場であったこの場所に、だんだん畑のように柔らかにまちと水辺をつなぐ風景を生み出した。

デビュタントへの質問

- Q. 自分の性格をひとことと言うと?
A. あきらめが悪い
- Q. いちばんうれしかったことは?
A. 自分の作品が地図に載ったこと
- Q. あなたの軸となっているものは何?
A. 自分に正直に心からよいと思えるものをつくりたい



ドボクノハヤ(2014) ©Atsushi Maya

子どもたちの世界を広げ、
世界中の人が
お互いのちがいを
リスペクトし合える

世の中になってほしい。

特別賞

中込孝規^{ダンサー}

profile

早稲田大学商学部卒。
ストリートダンス (HIPHOP、POPPIN) 歴16年。
大学在学中に「オールジャパン学生ダンス選手権大会」で優勝。教育系企業ベネッセに4年間勤務した後、「ダンスで世界一周」の夢を叶えるため退職。1年半で18か国57都市をまわり、1万人以上の子どもたちにダンスを教えながら世界一周をした。ラオス・ルアンパバーン国際映画祭、ジンバブエ・ハラレ国際芸術祭など国際的なイベントにもダンサーとして出演。その後、神奈川県平塚市にて「世界とつながるダンス教室」を開講。平塚を拠点に、日本全国、世界中を飛び回りながら活動している。
NHK「人生デザイン U-29」、「日テレNEWS24」出演、読売新聞連載など、幅広くメディアからも注目を集めている。
2017年、ダボス会議(世界経済フォーラム)により、世界の33歳以下の若手リーダー「グローバルシェイパーズ」に選出。2019年1月には、世界的なリーダーが集まるダボス会議(世界経済フォーラム 年次総会)にも日本人若手リーダーとして参加した。

やりたいことを

先延ばしにするのはやめた。

もともと行動力があるタイプだったわけではなく、子どものころは失敗が怖く、いろんなことから逃げ続けてきました。いじめられた経験もあり、人と接することも怖いと感じていました。ダンスを始めたのは、2歳年上の兄がストリートダンスを習っていて、カッコいい、モテそうだったから(笑)。大学に入って先輩の誘いで、キッズダンス教室のアルバイト講師に。教えていく中で「自分の積み上げてきたもので、他の人の役に立てるんだ」と驚きうれしくなったのを今でも覚えています。就職4年目にボランティアでダンスを教え始めたとき、自ら主催した会は不安でいっぱいでしたが、「やりたいことって、できるんだ」、好きなことをして、子どもたちにも、保護者にも喜んでもらえて、「なんて幸せなんだらう」と胸の内側が震えるほど感動しました。そして、夢だった世界中の子どもたちにダンスを教える世界一周の旅へ。

ダンスで、嘘はつけない。

素の自分をつながるツール。

実際に海外でダンスを教えたり、交流したりする中で、自分自身の価値観も大きく変化していきました。小さい子から年輩の方まで、世界中のどの人のダンスもカッコよかったし、みんなも僕のダンスを認めてくれました。2年間、1万人の子どもたちにダンスを教えながら世界一周をして、お互いの素をリスペクトし合う環境の中で、ありのままの今の自分にも価値があるんだと思うようになりました。何よりも、世界中に友だちができたことで、自分自身の人生の時間がとても豊かになりました。帰国後は、日本とアフリカを中心に、世界中の子どもたちを「ダンス×インターネット中継」でつないで交流するワークショップを主催。現在、23か国、1万5千人以上の子どもたちにダンスを教え、そのうち3,000人以上をつないできました。現在は神奈川県平塚市を拠点としたダンス教室、全国の学



日本と海外の子どもたちをインターネットで中継し、ダンスで交流するワークショップ。そこで、明るい子もシャイな子も、ダンスで一気に関係を縮め友達になる姿を見ると、先入観をもちたらず、その場でしっかりと相手と向き合うことが大切なかもしれません。

校などでの講演会などもしています。ダンスに限らず、子どもたちが多様な世界にふれて、可能性が大きく広がるような場づくりもしています。「文化」という側面で、ダボス会議などの国際会議で意見交換をさせていただいたりもしました。今後、活動をより深め、広げてくためには、地域に根差した活動が不可欠だと考えています。地域の小さい子どもから年輩の方までが集い、お互いから楽しく学び合うことができる場。日本中、世界中の人ともオンライン、オフラインを通してつながることができる場。そんな、「世界につながる地域の居場所」をつくっていきます。

デビュタントへの質問

- Q.自分の性格をひとことと言うと？
A. 人を巻き込むのが好き。
(怖がりだけど、好きなこと・やりたいことに対するチャレンジ精神が旺盛)
- Q.いちばんうれしかったことは？
A. 一番は選べないですが、世界中で出会った人たちと、また再会できること。
- Q.あなたの軸となっているものは何？
A. いじめられていたこと、ダンスで世界一周をしたことなど、過去の自分の経験が軸になっています。「ちがいを尊重し合い、ありのままの自分に自信をもってもらふこと」をしたいと思っています。

